

児童心理療法に関する研究(第3報告)

プレイ・セラピーにおける2, 3の問題

丹 下 庄 一

A Study on Child Psychotherapy (3)

Discussions on Some Questions in Play Therapy

SHOICHI TANGE

はじめに

初心者のプレイ・セラピストを訓練するためには、まず、実際にケースを担当させ、そのセラピー経験について、スーパーバイズしてゆく方法がある。初心者にとって、子どもと遊ぶときのセラピストの役割が十分に把握されていないとき、起りうる危険としては、セラピストの役割を自分が知らず知らずのうちに捨ててしまっ、子どものいうとおりに従い、ただの遊び友だちになってしまうことである。そこで、あらためて、子どもにとって、遊びとはなにか? セラピストとは? を考えたい。

I. 子どもにとって遊びの意味とセラピストの役割

Erikson¹⁾によれば、現代のプレイ・セラピーは次のような観察に基づいている。すなわち、「子どもは、自分の遊びを当然に保護してくれている家族や近所の人たちに、秘かな憎しみや恐怖を抱いて不安定になると、遊びの世界に平和をとりもどすために、理解のある大人の保護的な承認を求めらる。過去においては、祖母やお気に入りのおばさんがその役割を演じてきていたが、今日では、その役割を職業的に研究して演じているのがプレイ・セラピストである」。Eriksonは、さらに「遊びを演じつくすということは、児童期が提供する最も自然な自己治療の方法である」と述べている。

Amster²⁾は、「子どもの遊戯活動は自然な自己表現の手段であるので、遊びが子どもの治療に用いられる方法について、いろいろと考えられ、試みられ、さまざまな結論が出されてきた」と述べ、さらに「本質的に、遊びというものは、子どもにとってさまざまな意味をもつ活動であり、気持ちのよいものであり、子どもの世界にとって欠くことのできないものであり、コミュニケーションの手段であり、交換のなかだちとなり、試練の手段であり、部分的には、外界を自分のものに組み込み、支配

していく手段である」と、遊びが子どもに対してもつ意味や価値を定義づけている。「遊びは、実際に治療に役立つ関係をつくり上げるのに利用できる。この遊びは、言語的自己表現が大人のように十分できない子どもに適用すると効果があるし、考えを口に出すことに抵抗を示し、また表現の能力がない年長の子どもにも有効である²⁾」と、遊びの効用にもふれている。

Axline³⁾は、「遊びは子どもにとって、自己表現の自然な媒体であるので、蓄積された緊張感、フラストレーション、不安定感、攻撃性、恐怖、当惑、混乱などを徹底的に演じてみる機会を、子どもは与えられるわけである」と述べている。

Ginott⁴⁾によれば、「遊びは子どもの象徴的言語である。遊びを通して、子どもは自分自身や彼の世界について、どのように感じているのかを言葉でいうよりも、もっと生き生きと、またあまり自己を意識することなく、コミュニケーションできる。子どもはひそむ感情を述べることができ、禁止された脚本を行動化でき、そして対人関係で生じるディレンマや精神内部のディレンマを下稽古して、解決することができる。セラピストの役割は、遊びの言語を理解し、子どもに彼が理解していることを伝えることである」。

以上述べてきたように、児童の心理療法においては、理論的な立場は異なっても、遊びが子どもに対してもつ意味を見出している。そこで、これまでの研究者が明らかにしている遊びの意味をまとめてみると、Carek⁵⁾が言っているように、心理療法を受ける子どものために、遊びは二つの一般的機能を提供すると考えられる。すなわち、自己表現の機能とコミュニケーションする機能とである。心理療法において、子どもが遊ぶとき、その両方全部が作用していると考えられる。

Smolen⁶⁾は次のように述べている。「心理治療は、

一般に言葉を使って行なわれているが、子どもの個人治療の過程では、セラピストと子どもとの間に言語的な交換がなされていなくとも、かなりの程度まで治療ができることが、過去数年間の経験から明らかになってきている」。これは、子どもの心理治療の特異性を示すものであろう。実際に、われわれの治療経験によっても、例えば、言葉を殆んどいえない情緒障害児や自閉の傾向をもつ子どもの場合、その子どもは言葉を使わなくても、すなわち、子どもは非言語的活動を通じて遊びを展開し、それなりに心理治療の効果があがってきていることは、観察その他の資料によってわかっていることである。セラピストは、子どもの非言語的行動に対しても、言語的反応を示していることは多い。

一般的には、子どもとセラピストとの間では、かなりの言葉がかわされているのが普通である。子どもは遊びながら言葉でいうし、セラピストは、子どもの言語的行動に対しても、非言語的行動に対しても、適切な応答をしているからである。もちろん、この適切な応答がなされるためには、セラピストは、子どもの言語的なものであろうと、非言語的なものであろうと、子どもの行動の意義を、心理力学的な意味との関連で決定し、理解して、それを適切な言語的、あるいは非言語的な行動に移す必要がある。このとき、セラピストとして心得ておかねばならないことは、言語は行動のたんなる一側面にすぎないものであり、通例、治療においては、抽象的で象徴的水準での行動の代用形式なのであり、意味のある治療的な交渉は、言葉がなくてもおこりうるものであるということである。

子どもの遊びについて、診断的にまた治療的に見ていくことができる。もちろん、この場合、診断と治療というのは、はっきりとわかれていたものではなく、両者はからみあっているものである。本論文においては、まず、子どもの遊びの中の非言語的な面を主としてとり上げて検討してみたいと考える。

II. 遊びを通しての子どもの表現

1. 非言語的活動の定義

Woltmann⁷⁾ は、子どもの非言語的・投映的活動について考察をすすめている。彼のとり上げている非言語的・投映的活動というのは、子どもの思考や感情を理解することができるような非言語的表現様式のことである。もちろん、子どもの示す非言語的活動の凡てが、自己を明らかにする意味をもっているというのではない。彼が第一に関心をもつ非言語的コミュニケーションは、子どもが話し言葉の代りに使用する線、形、色、活動または遊び

の型というようなものである。Frankの定義にしたがって、これを投映とよんでいる。すなわち、人が刺激に対して反応するとき、予期されているような反応ではなく、その人特有の表現法で反応を示すとき、投映がおきているとみなすのである。

Woltmann⁷⁾ は、子どもの非言語的・投映的活動を評価するために、心にとめておく二要因として、次のものをあげている。

(1) 子どもは文化的または社会的ステレオタイプとの関連で、自己を表現しているのではなく、その活動に彼自身の特異性を与えているものである。

(2) 子どもは同じように知覚し、反応しているのではない。言語的および非言語的に自己を表現する能力は、成熟の要因に依存しているのである。

子どもの非言語的活動の多くがその表現様式であり、子どもがコミュニケーションする特別な言語と考えられる。例えていうならば、子どもは、語彙、文法、文章構造法を使う代りに、その成熟的発達に応じて、線、形、色、運動、音響、遊びの型の選択、遊びの型の強度と持続、集合の布置、反復その他多くの表現様式を使うというのである。これらのさまざまなコミュニケーションの手段を適切に評価するためには、子どもの非言語的言語を解読し、理解するように努めるべきであるとされている。次に遊びの材料との関連でみてみよう。

2. 非言語的活動と遊びの材料との関連

a. 可塑的な材料

砂、水、粘土、細工用粘土、指絵具などが可塑的材料と考えられる。これは退行的なタイプの遊びに使われることが多い。もちろん、子どもが遊びの材料を使って、どのように遊ぶのか、また遊びに伴って示す情動の状態をよく観察するわけであるが、可塑的材料は道具であると同時に意味を運搬するものであるので、このような材料を選択したということは、それなりの意味をおびてくるからである。

砂は、それ自身さまざまな遊びの型に役立つ。例えば、高くしたり、くぼみをつくったりする組み合わせによって、子どもは、トンネル、山、川、さまざまな風景、地質構造をつくることができる。砂は安定しているので、子どもの身体を支えたり、子どもが砂に置いた物を支える。プレイ・セラピーの途中で、子どもが砂場の砂の上に、気持ちよさそうに寝ころがったり、うつ伏せになったりすることがある。

水は、これに反して、流動的な媒体であり、永久的な構造をもつものを作ることはできない。水の中に入れた物は泳ぐか、漂うか、沈んでしまう。

砂と水で遊んでいると、子どもは、砂は汚くするものであるが、水はきれいにするものであることを容易に理解して、洗濯と呼ばれるような遊びの型が生れてくるものである。子どもは汚すことも好きであるが、きれいにすることも喜んでやるものである。人形の服を洗っている子どもは、本当に熱中して愉しんでいる。さらに裸になった人形の髪を揃けずってやり、身体までもきれいに洗った上で、新しい服を着せてやる。浄化という働きとともに、このような遊びは母性的な要求を満足させるものといえよう。

遊びの媒体としての水と砂をまぜると、新しい可塑的な媒体である泥がつくられる。水と砂の割合を変化させてやると、いろいろな濃度の泥水から可塑的な塊りまでつくることができるとともに、それで遊ぶこともできる。砂や泥を投げたり、水をあびせかけたりすることにより、子どもは、これら三つの媒体をすぐれた攻撃や防衛の武器として使用するわけである。

これらの素材のままの媒体は、発達を援助する上で重要なものといわれている⁸⁾。その理由としてあげられているのは、子どもは、これらの媒体により、環境の物理的特性を大いに学ぶことができるからということである。すなわち、ものが硬いか柔らかい、温かいとか冷たい、乾いているとかしめっている、安定しているとか不安定であることを、経験によって知ることができるからである。

普通の子どもでは、4歳から5歳の間に粘土や可塑的な材料を扱うようになるといわれるが、時には、大きくなった子どもでも、上述の原始的な遊びの媒体を使うような逆戻りを示すことがある。このようなことがおこるのは、その子どもの自我が非常に未熟であるとか、発達の面で遅滞があるとか、情動的に阻害されて、同年輩の子どもと対抗ができないという場合であるともいわれている。また言葉の発達が適切になされていなかったり、言語能力が乏しい子どもにも、同じことがいえると考えられている⁸⁾。

実際に、子どもの心理治療を行なっている場合、プレイ・セラピーの場面で、原始的な発達段階である砂や水、泥の遊びを、初期の面接から、くり返し展開していく中に、次第に治療的な効果を見せてくる事例も経験している。その中から二つの事例をあげることにしよう。

事例1 小学校3年生の男児。脳波異常が認められ、集団生活への適応は困難である。自閉的な傾向も示している。本児は「埋立工事」と称して、遊戯治療室の床に水を多量にまく。それから砂場の砂をトラックへ積んで運び、水の上へあける。さらに水をまく作業と砂をかぶ

せる作業を反復して行なう。その作業ぶりは、まことに真剣で熱心である。治療面接を重ねていくうちに、水の量は次第に減少を示していった。

別の治療面接のときには、中のチューブをぬいた古タイヤの空白になっているところへ、まず水を入れて、タイヤをセラピストめがけてころがしてくる。セラピストの方も、タイヤを本児へむけてころがしてみる。本児とセラピストとの間でタイヤのころがしこの遊びが展開されていくが、タイヤは真直ぐにころがっていくばかりでなく、ときには、途中でひっくり返ったりすることもある。すると、タイヤの中に入れた水がこぼれ出して、床に水たまりができる。すると、本児は床全部が水でぬれてしまうように、今度は、水をバケツに入れて、持ち運びながら手で水をくみ出して行く。床全部が水でぬれてしまうと、「気持ちがおちついた。スツとした」という。

水遊びの利点については、Hartley et al⁹⁾の論文があり、それを参照しながら、本児の場合を考えてみると、埋立工事にせよ、タイヤの水遊びにせよ、不安定な気持ちを落ちつかせるとともに、浄化的な効果をもっていたのではないと思われる。水を多量にまいて、水びたしにするという本児の表現には、それ以外に、やはり攻撃衝動の吐け口として選んでいるようである。敵意、憎しみという情動が本児の場合、蓄積されていたようで、それは、本児の母親からの報告によっても明らかであった。

このような水遊びは、くり返されていても、次第にその強度は減少し、一応選択されなくなってしまう。そして、思い出したように、水遊びが選ばれることがあったが、激しいものではなく、気持ちを柔らげるために必要なものであったというように、セラピストには、理解できるものであった。本児の場合は、他の子どもよりも、社会的発達や積極性の面で遅れていたと考えられる。

事例2 小学校1年生の男児。軽度の脳波異常が認められる。ちえ遅れと自閉的な傾向もみられる。本児は、バケツに水を入れ、砂場の砂をめがけて、何杯も水をぶっかけていく。ある程度まで砂がしめりをおびてくると、一応作業は終りとなるが、砂場の砂が水分をおびるだけでなく、水かけ作業により、床の方も水びたしになることが多い。

別の水遊びは、流しの水槽に水がたまるように栓をした上で、水を勢よく出して、その水で、玩具のトラックを水洗いする。本児が得心のいくまでトラックを水洗いして、作業は終了となるが、本児の場合、水をマスターするという要求の満足と、触覚的な快楽が得られ、また攻撃的な衝動をみだすことができているようである。

粘土や細工用粘土を使うと、子どもは自分が関心をも

っている動物や乗物、人物像などを三次元的に表現し、造り出していくことができる。粘土は押しつぶしたり、ちぎったりした上で、それらを合わせると、またもとのように一つになることを経験できる。細工用粘土は、いつまでも固くならず、何度でもくり返して使うことのできる便利さがある。描画したあととは、そのまま固定され、変えようと思うと、消したり、色をぬり変えるなどしなければならぬのに対して、粘土のような可塑的材料は、軽いタッチを加えたり、押ししたりすると、すぐ変わりうる媒体という特徴をもつ。また指絵具も同じであるが、可塑的材料を使って、造形作業をするには、片手による描画作業とは異なり、両手を使って材料を扱うので、両方の腕と手や指の協応が早くから行なうことができる。子どもの中には、指絵具を汚ないからといって拒否する子どももいるが、その場合、家庭において、清潔のしつけが厳しすぎることが多い。このような子どもは、無理に指絵具や粘土をいじらせるようにしむけると、母親の権威に従うべきか、それとも反抗すべきであるのかという葛藤状態に子どもを追いこむことになるので、他のもっと清潔な活動、例えば積み木遊びなどを選ばせる方がよいとされている⁷⁾。

b. 描画のための材料

鉛筆、クレヨン、絵具、木炭、筆のような道具と、描画によるコミュニケーションを展開させるための紙、カンバス、黒板のような材料をいう。

子どもは、自分の思うように、線や色を使って表現することができるが、三次元的に表現できる造形の場合とはちがって、描画の場合は二次元的にしかあらわすことはできない。

紙の隅に小さく人物画がかかれた場合を考えてみよう。これによって、子どもがコミュニケーションしていることは、次にあげるようなことである。

- (1) 自分が小さいという感じ
- (2) 大きな世界に圧倒されているという恐れ
- (3) 自分を伸ばすことの恐れ
- (4) 自分とはとるに足らないという感じ
- (5) 自分は重要性をもたず、価値がないという感じ

子どもは、このような感情をもっているとしても、それを言いあらわす言葉をもたず、彼が描いたものに自分の感情を投射しているといえる。その理由は、子どもは、われわれと同じく、自分の見ているものを表現するのではなく、むしろ、知り、感じているものを表現しているからである。上述のような人物画が小さく描かれていることは、その子どもについて診断的な手がかりを与えていると考えてよい。描画は、子どもが自分を非言語的に表現

する機会を広範囲に与えているといえるのである⁷⁾。

この描画を理解するための基準として、Ram bert¹⁰⁾のあげているものは参考とすることができる。すなわち、

(1) 外界の対象に情動的な葛藤を置き換えたり、投射するものである。例えば、おびえた山を描いたり、こわがっているもみの木を描いたりする。

(2) 人気者や非常に強い動物、小人国におけるガリバーのような巨人と自分とを同一視して描く。

(3) 重要と考えている細部を強調しすぎることがある。例えば、1本の手に、7、8本の指がついているように描くなど。

(4) 1つの絵の中に、いろいろな性格特性を示すものをたくさん圧縮してかきこむ、いろいろな記憶を圧縮してかきこむ。

また、子どもにとって重要性を最ももっている対象は、不釣合いに大きく描いたりするので、絵の中の対象の寸法を十分注意してみることが大切である。

c. 積み木

積み木は未構造の材料と構造化された材料の中間のものである。積み木を使って、子どもは自分の造りたいものを創り上げていく。例えば、大きな城、飛行機、家などである。造った積み木の建造物をたたきこわす子どもは、攻撃性をあらわしているし、積み木そのものを、防衛の道具としたり、攻撃の武器として使う子どもは、攻撃をはっきりとあらわしているようである⁷⁾。

d. 玩具

子どもが玩具を使って遊んでいるときは、何をそこから知ることができるのか。一応玩具の遊びは大別することができる。

例えば、人形と家の遊びには、家庭のイデオロギー、家族の布置を知ることができる。

家、木、自動車、飛行機、人、動物のような環境的な玩具を使用する場合、子どもの注意を環境に向けさせるものである⁷⁾。プラレールを使っての遊びは、その接続の仕方、全体としての配列、構成度などを注意してみていくと、子どもの心理状態(安定か不安定か)、要求水準の程度、成功・失敗という適応の問題についてとらえることも可能である。

事例3 場面緘黙の小学校5年生の男児。熱心にプラレールと取りくむ。プラレールの接続は、最初入り組んだ配列の仕方から、次第に整理されて、すっきりとした配列へと変わっていき、汽車は、大きな円型のレール上を走ることになる。列車の長さも、走るのがようやくという長い列から、車両の数を減らすことにより、快適に走るようになる。脱線しやすい危ふやなレールの接続も

強化され、しっかりとした構成をもつように変えられる。本児は、最初の要求水準を下げるにより、一応の課題成就という満足感を得て、心理的にも安定をとりもどしていることが、セラピストに伝わってくる。

要 約

プレイ・セラピーにおける遊びの意味について検討を加え、遊びを通して子どもが表現し、またセラピストにコミュニケーションしているものを、どのようにとらえるかについて、遊びの材料との関連で考察した。

文 献

- 1) Erikson, E. H. : Toys and reasons. In M. R. Haworth (Ed.) Child Psychotherapy. Basic Books, Pp 3-11 (1964)
- 1) Amster, F. : Differential uses of play in treatment of young children. In M. R. Haworth (Ed.) Child Psychotherapy. Basic Books, Pp 11-19 (1964)
- 3) Axline, V. M. : Nondirective therapy. In M. R. Haworth (Ed.) Child Psychotherapy. Basic Books, Pp 34-39 (1964)
- 4) Ginott, H. G. : Interpretations and child therapy. In E. F. Hammer (Ed.) Use of Interpretation in Treatment, Grune & Stratton, Pp 291-299 (1968)
- 5) Carek, D. J. 石川尚子・勝倉孝治・高野清純・渡辺三枝子訳：児童心理療法の原理，日本文化科学社，P76 (1974)
- 6) Smolen, E. M. : Nonverbal aspects of therapy with children, In M. R. Haworth (Ed.) Child Psychotherapy, Basic Books, Pp 306-314 (1964)
- 7) Woltmann, A. G. : Diagnostic and therapeutic considerations of nonverbal projective activities with children, In M. R. Haworth (Ed.) Child Psychotherapy. Basic Books, Pp 322-330 (1964)
- 8) Woltmann, A. G. : Mud and clay, their functions as developmental aids and as media of projection. In M. R. Haworth (Ed.) Child Psychotherapy. Basic Books, Pp 349-363 (1964)
- 9) Hartley, R. E., Frank, L. K. and Goldenson, R. M. : The benefits of water play. In M. R. Haworth (Ed.) Child Psychotherapy. Basic Books, Pp 364-368 (1964)
- 10) Rambert, M. L. : The use of drawings as a method of child psychoanalysis, In M. R. Haworth (Ed.) Child Psychotherapy. Basic Books, Pp 340-349 (1964)

Summary

First we examine the meanings of playing in play therapy, and then, in terms of play materials, we discuss how to understand what children express in their play and how to interpret what they communicate to the therapist.